

令和 2 年 7 月 11 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26380956

研究課題名(和文) 生殖医療によって妊娠、出産、育児に至った当事者の心理過程

研究課題名(英文) Psychological process in couples with children following infertility treatment : during pregnancy, childbirth and parenthood

研究代表者

菅沼 真樹 (Suganuma, Maki)

東海大学・文化社会学部・准教授

研究者番号：40453708

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：不妊治療後の妊婦は流産などの不安が高いこと、母親役割の獲得には夫婦関係の良さ、出産体験への満足、不妊である自己の受容が重要であることが示された。また、不妊治療中、妊娠中、分娩時、育児期と夫婦の関係性は変容していき、その変容の在り方は多様であることも示された。生殖医療や周産期医療の現場において、不妊治療中はもとより妊娠中や産前・産後にわたって、十分な理解のもとに適切な心理的支援が提供されることの重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、生殖医療(不妊治療)の発達に伴い、これによって妊娠、出産に至る当事者数は年々増加、蓄積している。このような社会的背景のもと、不妊治療中の患者の心理的ストレスについては一定の研究結果が蓄積され、不妊治療中の患者がさまざまなストレスを経験しやすいということは社会一般においても知られるようになってきている。一方、不妊治療後の妊娠、出産、育児期における当事者心理についての研究は多くはない。本研究ではこれらをまとめ、不妊治療経験者に対する生殖医療現場、周産期医療現場における心理的理解と心理的支援の在り方について臨床的示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：Pregnant women after infertility treatment had high anxiety for miscarriage. Goodness of marital relationships, satisfaction to childbirth, acceptance of self as infertile women were important to maternal role attainment. Marital relationships diversely changed during infertility treatment, pregnancy, childbirth and parenthood. The importance of psychological support in reproductive and perinatal medicine was clinically implicated.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：生殖医療 妊娠 出産 育児

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、生殖医療(不妊治療)の発達に伴い、それによって妊娠、出産に至る当事者数は年々増加、蓄積している。わが国で体外受精等の高度生殖補助医療によって誕生した子どもの数は、2017年には過去最多の56,617人であった(日本産科婦人科学会, 2019)。同年にわが国で誕生した子どもの総数は946,065人であり(厚生労働省, 2018) 今日ではわが国で誕生した子どものおよそ16人に1人が高度生殖補助医療によって誕生しているといえる。

このような社会的背景のもと、不妊治療中の患者の心理的ストレスについては一定の研究結果が蓄積され、不妊治療中の患者がさまざまなストレスを経験しやすいということは今日では社会一般においても知られるようになってきている。一方、不妊治療後の妊娠、出産、育児期における当事者心理についての研究は多くはない。一般に、体外受精等の高度生殖補助医療による妊娠率は3割程度とされ、不妊治療施設を受診した夫婦の半数以上は子どもを授かることなく治療を終えるといわれている。不妊治療を経て妊娠、出産、育児へと至る者は、不妊治療患者全体からみれば少数派といえるが、その実数の増加を鑑みれば当事者の心理過程や求められる心理的支援について検討していく必要があると考えられる。

2. 研究の目的

生殖医療(不妊治療)によって妊娠、出産、育児に至った当事者において、不妊治療中、妊娠中、出産、育児期それぞれの段階における心理はどのようなものであるのか、またそれらの段階はどのように移行していくのかを把握することを目的とする。加えて、不妊治療を経た妊娠期、出産、育児期の夫婦関係や親子関係を展望したとき、不妊治療中の当事者に対してはどのような心理的支援が求められるのかについて臨床的示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

生殖医療(不妊治療)によって妊娠、出産、育児に至った当事者を対象とした研究について文献研究を行った。その上で、生殖心理臨床現場における筆者の臨床経験とも関連づけながら臨床的示唆をまとめ、今後の課題を検討した。

4. 研究成果

自然妊娠によって親になった者と生殖医療を経て親になった者とを比較すると、体外受精によって妊娠した夫婦の親移行に関する縦断的研究の多くは、自然妊娠群に比べて差がなかったかむしろ健康であると報告するものが多い(小泉, 2008)。

壹岐(2017)によれば、不妊治療後の妊婦は、流産や子どもが健康に生まれてくるかという不安は強い傾向にあるが、妊娠中から産後についての不安は持ちにくいという。また、母親役割獲得過程が順調に進むためには、夫婦関係が良好で出産体験に満足していること、不妊である自己を受容していることが重要であるという。さらに、不妊治療後の妊娠では、元気な子どもを無事に出産するというところまではイメージが持てるものの、産後の具体的なイメージは持ちにくい傾向にあり、不妊治療の経験をさまざまな葛藤を乗り越えながら受け止められていくことが次の段階へ進むために重要な要素であるとしている。

佐藤・横溝・笠原・宇田川・楠原・稲川・拝野(2019)は、不妊治療で妊娠した初産婦を対象に産後3年時点で質問紙調査を実施し、産後1か月時点でのエジンバラ産後うつスコア(The Edinburgh Postnatal Depression Scale; EPDS)との関連を検討している。その結果、不妊治療中よりも育児中の方が相談できた相手の人数は有意に多く、育児に関してよりも不妊治療に関しての方が相談しにくい傾向にあった。そして、産後1か月時点でのEPDS8点以下を低リスク群、9点以上を高リスク群として検討したところ、不妊治療に関して相談できた相手の人数は高リスク群において有意に少なく、育児に関して相談できた相手の人数は高リスク群において少ない傾向にあった。また、高リスク群では不妊治療や育児への夫からのサポートについての満足度が低く、不妊治療中や育児中に孤立感を感じる頻度が高かった。さらに、産後1か月時点でのEPDSと育児中に孤立感を感じる頻度との間にやや強い相関が認められた。これらの結果から、産後健診は通常1か月後に終了してその後については医療機関でのフォローアップは行われないうえ、不妊治療中は外来通院回数が多いため育児につながる心理的ケアを行う必要があるとしている。

野内・永見(2018)は、不妊治療後第一子を出産した産後2か月から1年2か月までの夫婦8組を対象に半構造化面接を実施し、不妊治療後に産出した夫婦の関係性変容の様相を、対パートナー感情と相互間の関わりという2つの視点から4類型化している。すなわち、肯定的な対パートナー感情を基盤に効果的な相互間の関わりによって夫婦の関係性が強化され発達していく「関係発達型」、治療により一旦は否定的な対パートナー感情が出現したものの相互間の関わりによって夫婦の関係性が好転する「関係好転型」、治療に関連した否定的な対パートナー感情を持っているが子どもの誕生により今後の相互間の関わりを通して夫婦の関係性変化を期待する「関係変化期待型」、治療に関連した否定的な対パートナー感情を持ちつつ相互間の関わりでは現在の夫婦の関係性を維持する「関係温存型」である。関係発達型では、話し合いにより不妊治療開始について夫婦の意見が一致していると認識していた。関係発達型の妻は不妊治療中に夫からの労りを感じて治療に前向きに取り組んでおり、妊娠中や分娩時にも夫が夫婦関係を良好に保つための意図的な関わりを行ったことが関係性を発達させる要因となったと推察されている。

関係好転型では、不妊治療開始時や不妊治療中には妻から夫への否定的感情が表出されていたが、消失する転機となった妊娠期の具体的場面が示されていた。関係好転型の妻は不妊治療や妊娠期のつらさの体験を肯定的にとらえており、夫も不妊治療経験により妻への肯定的感情を増強させていた。関係変化期待型では、妻に生じた不妊治療に関する夫への否定的感情は、改善を要求しても叶えられないことの積み重ねによって抱え込まれていた。不妊でなければ生じなかった諍いや妻の夫婦関係への諦めが生じており、良好な夫婦関係が喪失された状態と考えられるが、子どもの誕生を転機として家族関係を調整していく中で新たな夫婦関係構築への期待につながったのではないかとされている。関係温存型では、不妊であることによって生じたパートナーへの否定的感情は、パートナーへ伝えられることなく個人内で抱えられていた。関係温存型においてパートナーへの否定的感情を持ったのは、不妊原因が自分ではないと認識している側であった。

第一子出産後に第二子を希望しても妊娠に至らない場合、「二人目不妊」と呼ばれる。勝村・神谷・恵美須(2020)は、不妊治療を経て第一子を出産した後に第二子妊娠のために再度不妊治療を受けている女性9名(第一子は0歳から8歳)を対象に半構造化面接を実施し、その体験を明らかにしている。第一子出産後から不妊治療再開までの体験として、「第一子の発達や健康に関する出来事を不妊治療に関連付けて考える」、「徐々に前回の不妊治療と第一子の健康を結び付けて考えなくなる」、「不妊治療で妊娠できたことを肯定的にとらえる」、「第二子が欲しいと考えようになる」、「前回の不妊治療経験があるからこそ、今回も治療を受けようと思う」の5カテゴリーが抽出された。第二子妊娠のための治療中の体験として、「治療再開に伴い、不安や自然妊娠できる人への羨ましが再燃する」、「第一子がいることによる新たな通院治療の悩みを抱える」、「今回も治療や年齢による児の異常を心配する」、「不妊治療の終結を考え始める」の4カテゴリーが抽出された。不妊治療を経て出産した女性は、子どもの発達や健康に関する出来事を不妊治療に関連付けて考える一方で、自身の子どもの成長を見る過程で徐々に子どもの個性をとらえる考え方に変化しているのではないかとしている。また、不妊治療施設スタッフの励ましがあから第二子の不妊治療も頑張ろうと思えるという体験が収集され、施設スタッフの温かな対応が不妊治療継続の重要な要素となり、第一子妊娠のための不妊治療中にスタッフからの励ましなどのサポートがあったことで第二子妊娠のための不妊治療再開のハードルが低くなったと考えられるとしている。

一方、介入・支援に関しては、崎山(2015)は、妊娠初期では流産により再び不妊の状態へ戻ることを案じて妊娠を喜ぶことを差し控えることがあり、この妊娠初期を不妊と妊娠の両世界に跨る不確かな時期であるとして、高度生殖補助医療を経て妊娠初期にある女性の妊娠への適応を支援する看護介入プログラムを開発している。その結果、プログラム要素のガイダンス、不妊経験の回想、経験の共有は支援ニーズを充足させ、喪失への予期不安、特性不安の軽減を図り、不妊経験の回想、経験の共有は不妊経験によるポジティブな変容を図る可能性が示唆された。

壹岐(2017)は、不妊治療によって生じた不安やストレスは、妊娠によってすべて解消されるものではなくその後の妊娠、出産、育児にまで影響を及ぼし、特に生殖補助医療は妊娠までの過程で女性に多くの努力やストレスを与えるため、妊娠することがゴールとなりその先にある出産や育児に関心を向けることが困難になることもあると指摘している。そのため、不妊患者の精神面の状況を的確にとらえ、患者に合わせた支援を提供することが必要であるとしている。

臨床的には、周産期医療現場において不妊治療後の妊婦は些細なことにも敏感で対応上の特有の困難さがあると実感されることがある。平山(2016)は、「不妊の傷つきを癒す期間としての妊娠期間」という視点を提示している。近年の生殖医療技術の進歩によって受精卵の可視化が進み、親子の出会いは受精卵の段階にまで早められたことにより、不妊治療中には従来以上に明確な形でわが子の喪失が頻繁に経験されているという。そのため、不妊治療で妊娠したということは、それまでに無数の出会いと喪失を繰り返し経験し疲れ切っている状態であるということとを、まず理解する必要があるという。周産期医療現場においては、妊娠期間はこれまでの不妊の傷つきを癒す期間でもあるという理解のもとに、不妊治療を経た母親と生まれてくる子どもとの出会いを支える支援が求められるとしている。

以上のように、不妊治療中は生殖医療現場での心理的支援を、妊娠中から出産までは周産期医療現場での心理的支援を提供し得るため、それぞれの医療現場では個人カウンセリング、カップル・カウンセリング、セミナー形式でのグループなどのさまざまな心理的支援が既に提供されており、今後も一層の充実が望まれる。一方で、生殖医療や周産期医療の手から離れて家庭や地域へと戻る育児期においては、不妊経験者としてケアされる場面は期待されにくい。しかしながら、不妊経験者としての自己を意識させられる場面は、育児期において日常的に存在すると考えられる。例えば、長期間の不妊治療を経て出産に至った場合、希望していた年齢よりも高齢での出産となり、育児期において母親集団内では自身が高齢であることに直面し、不妊経験者であることを再認識させられるということも経験され得るであろう。あるいは、子どもがきょうだいのいる友だちを見て弟妹を欲しがり、その期待に応えることは容易ではないことから不妊経験者であることを再認識させられるということも経験され得るであろう。自然妊娠による「普通」の家族、「普通」の親子と同じであろうとする不妊当事者の心理を理解した上で、育児期以降の不妊

経験者をいかに支えていくかは今後の課題である。

<引用文献>

- 平山史朗(2016). 不妊という課題に向き合う 永田雅子(編著) 妊娠・出産・子育てをめぐるこころのケア- 親と子の出会いからはじまる周産期精神保健- (pp.75-81) ミネルヴァ書房
- 壹岐さより(2017). 不妊治療後の妊娠における精神面に関する研究の動向と今後の課題 日本生殖心理学会誌, 3(1), 26-32 .
- 勝村友紀・神谷摂子・恵美須文枝(2020). 第一子出産後から第二子妊娠へ向けて再度不妊治療を受ける女性の体験 母性衛生, 61(1), 167-176 .
- 小泉智恵(2008). 子どもをもつこと, もたないこと- 生殖医療と家族の形成- 柏木恵子(監修) 塘利枝子・福島朋子・永久ひさ子・大野祥子(編) 発達家族心理学を拓く- 家族と社会と個人をつなぐ視座- (pp.139-153) ナカニシヤ出版
- 厚生労働省(2018).平成 29(2017)人口動態統計(確定数)の概況 .Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei17/index.html>
- 日本産科婦人科学会(2019).ART データブック 2017 年版 .Retrieved from <https://plaza.umin.ac.jp/~jsog-art/>
- 野内香純・永見桂子(2018). 不妊治療後第一子の育児期にある夫婦の関係性変容の様相 母性衛生, 58(4), 557-566 .
- 崎山貴代(2015). 生殖補助医療を受けた女性に対する妊娠初期の適応支援プログラムの開発と評価 2015 年度聖路加国際大学大学院博士論文
- 佐藤琢磨・横溝 陵・笠原佑太・宇田川治彦・楠原淳子・稲川早苗・拝野貴之(2019). 不妊治療とエジンバラ産後うつスコアの関連について 日本生殖心理学会誌, 5(2), 14-19 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菅沼真樹	4. 巻 706
2. 論文標題 不妊治療を経た妊婦や母親の心理とその支援	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 月刊母子保健	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅沼真樹	4. 巻 2, 2
2. 論文標題 生殖心理カウンセリングにおける傾聴とは 臨床心理士の立場から	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本生殖心理学会誌	6. 最初と最後の頁 35-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅沼真樹	4. 巻 18
2. 論文標題 「親」の心に生きる「わが子」との関係性 産婦人科心理臨床の立場から	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 37-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅沼真樹・西島千絵・星名真理子・尾形留美・杉下陽堂・鈴木直	4. 巻 1
2. 論文標題 がん・生殖医療外来における患者の心理とその支援課題	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 日本生殖心理学会誌	6. 最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計32件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 菅沼真樹
2. 発表標題 セクシュアリティをめぐる家族の多様性
3. 学会等名 日本家族心理学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平山史朗・菅沼真樹
2. 発表標題 生殖医療と家族
3. 学会等名 日本家族心理学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹内愛・菅沼真樹・泉谷亜子・村上さやか・竹間良子・千葉真美江・石塚文平
2. 発表標題 卵巣機能不全患者における来談傾向の検討
3. 学会等名 第16回日本生殖心理学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅沼真樹
2. 発表標題 生殖心理臨床のこれまで、いま、これから
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菅沼真樹・竹内愛・泉谷亜子・千葉真美江・馬鳥ひとみ・石塚文平
2. 発表標題 早発卵巣不全患者を対象とした院内グループ形式でのメンタルサポート 「ローズの会」開催の試み
3. 学会等名 第14回日本生殖心理学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菅沼真樹
2. 発表標題 早発卵巣不全患者を対象とした生殖心理カウンセリング
3. 学会等名 日本生殖心理学会第7回継続研修会生殖心理カウンセラー分科会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 菅沼真樹
2. 発表標題 生殖心理カウンセリングにおける傾聴とは - 臨床心理士の立場から -
3. 学会等名 第13回日本生殖心理学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 菅沼真樹・星山千晶・吉永明美・平山史朗・野末武義・中島美佐子・小泉智恵
2. 発表標題 生殖心理臨床における困難事例 - 生殖・不妊の心理臨床（6） -
3. 学会等名 日本心理臨床学会第33回大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 上田倫子・小澤千恵・菅沼真樹・内赤さやか・大野麻美・岡部菜摘・亀岡美紀・中野美由紀・小野義久・堀川直史・関博之
2. 発表標題 入院中の切迫早産患者のメンタルヘルス
3. 学会等名 第11回日本周産期メンタルヘルス研究会学術集会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 菅沼真樹・上田倫子・大野麻美・内赤さやか・谷島春江・小澤千恵・細谷伊津美・松本瑞江・関博之
2. 発表標題 産婦人科・産科における心理士の実践と多職種連携
3. 学会等名 第60回日本母性衛生学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅沼真樹・竹内愛・泉谷亜子・村上さやか・竹間良子・千葉真美江・石塚文平
2. 発表標題 不妊症患者を対象とした知識伝達・体験型の院内セミナーによるメンタルサポート
3. 学会等名 第17回日本生殖心理学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宇津宮隆史・菅沼真樹・清水清美・白井千晶・萬屋育子・堀田敬子・平山史朗
2. 発表標題 さまざまな「家族のカタチ」と生殖医療
3. 学会等名 第17回日本生殖心理学会学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 菅沼真樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 92
3. 書名 生涯発達心理学	

1. 著者名 菅沼真樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 169-181
3. 書名 家族心理学年報37 保健医療分野に生かす個と家族を支える心理臨床	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----